

随想



ポジティブ生活の すすめ

小池聰行

(オリコン代表取締役会長兼社長)
'57年大学文学部社会学科卒業

人生を楽しく生きる、ということについて異存がある人はいないと思います。楽しみ方もいろいろあつて、どれをとつてもすべて捨てがたいものばかりです。そのうちの一つ、私が実践しているものをお話します。

「しかし…」とか「そんなうま

うな使い方です。従つて、ネガティブというのは、消極的、否定的という意味になります。

例えば人の悪口を云うというのは、ネガティブです。人を褒めるのは当然ポジティブです。ね。

悪口つまり、ネガティブな言葉というのは、相手がそこに居ようが居まいが関係なくネガティブな結果を招き寄せます。

そして、最も結果として出やすいのは、その人自身がそのくり返しによつて、ネガティブな人間に造られていくという事実、です。

私は誰かと話をしていて、或る人の話題を出そうと思つた時に、その人の悪口になりそうだと感じたら、その話題は出さないうようにこころがけています。

褒める場面になる時にのみ、話題の中に登場してもらうようにするわけです。

この他に普段心がけているこ

とは、人に会つた時に、特に初対面の場合、出来るだけその人のいい所を発見する努力をし、欠点は見ないようにします。

いつも、どんな人と会つても、すばらしい人だ、と心から思えるように、心の方向性をポジティブにしておくようにするわけです。

よく、初対面の時に頭のでっぺんからつま先までじろつと見て、欠点ばかり探し、後でそれを滔滔とまくし立てる人がいます。

こういう場面は自分自身を落とし穴に落とし入れられているみたいなもので寂しいことですね。

もう一つ大事なことは、他人の意見は否定しないことです。出来る限り肯定的に聞くようにします。相槌を打つなどし、相手が話しやすいように雰囲気作りを心がけます。

相手が話し始めたばかりなのに、もうどのように否定するかとそればかり考えている人がい

ますね。

有名人にも結構います。

評論家あるいは評論家的な人物に多いように思います。こういう人と話をしていると、識見の中の狭さというか、人間の巾の狭さというか、如実に感じてしまいます。

自分以外はみんな我が師と違って聞いていると、どんな人からも学ぶことができるし、楽しいわけですよ。

最後に自分自身が落ち込んでいる時はどうするんだ、と云われるかも知れませんがね。

私の場合は、あらゆるものに感謝するようにしています。そうすると不思議といっぱい自信がつくようなことが発見されてきて、真から自信がついてきます。

まだまだお話ししたいことがいっぱいあるんですが、人生を楽しむのかどうかの鍵は、ポジティブ思考で生活できるかどうか、究極これなんです。

総てのものを、積極的、肯定的にとらえていく、消極的、否定的な心は捨てていく、これで行くと、バッチリです。

五十余年を経て

卒業式にのぞんで

「良かったわね」

金 玉羅

（社会福祉法人覚堂福祉財団代表理事、韓国同志社同窓会副会長）
'45年同志社女専英文科卒業

一九九九年三月一八日は私共一九四五年女専卒業生にとつて忘れられない歴史的な日でした。戦後の混乱で証書だけを事務所で受け取り卒業式が行えなかった私達に卒業式が与えられました。遠く去ってしまった半世紀前の若くて楽しかった昔の時を呼びもどして今の時と結び付けた尊い日でもありました。皆が「良かったわね」の連発で

した。大橋寿美子女子大学長の式辞と松山義則総長の祝辞は感銘深く涙を催しました。

当日発行の京都新聞は「乙女の願いが花咲いた」と述べてました。一九四五年度の卒業生は英文科・家政科合せて百七十五人でしたが所在のわかる百三十五人に連絡して当日参加者は四十六人でした。五十四年ぶりの卒業生のために同志社の先生方、同窓会の皆様、クラス会の幹事が真心をこめて尽力して下さいまして本当に感謝で一杯でした。

思いかえせば戦争の渦中でしたので勉強も思う様に出来ませんでした。特につらかったのは最高学年にあたる大切な時期を学徒連年動員令で工場働きをさせられ夜毎空襲警報のために眠れない夜でした。しかし、今考えて見るとそれは最上の人生訓練でした。訓練は人間を鍛錬するものでしょうね！もはや七十を越えて人生の黄昏期に入っ

ているにもかかわらず皆がしっかりしていました。

教師・教授・画家・社会事業家・貿易自営・ホテル支配人・国際的教会指導者等あらゆる方面で活躍した前歴を持つている私達の顔には内的充実さがあるていまして。困難な時代に生きたためにそれを切り抜いて立ち上がらざるを得なかったのが私達の生き方であったと思います。そしてそれなる底力は同志社からさずかれたものと思いません。

人間は環境と歴史の流れからしきりに影響を受けつつ、また自然環境と歴史に至大な変化を与える能力をも与えられています。困難と畏縮の暗い歴史を私達は愛する母校同志社女子大学と一緒に切り抜いて今日の新しい歴史をもちました。

困難は鍛錬を生み、鍛錬の中で新しい歴史が創り出されるといふ真理への悟りが、五十四年後の卒業式に参列させて頂いて

「あー良かったわね」と歓喜の叫びの中から出現しました。

夏の北海道で

思う

中澤克巳

(美術監督)

79年大学文学部社会学科卒業

今年の夏は映画「G.T.O」の撮影で北海道におりました。雪解けの始まる四月にロケハンを開始してから八月中旬まで、四月半北海道と付き合いました。仕事ながら地方を訪れることも多く、この地へも何度も来ていますが、北海道といえばやはり冬の厳しい風景を撮影に来ることが多く、夏場このように長く滞在するのは初めてです。

ロケは十勝地方の帯広、空知地方の芦別を中心に行いました。が予想外の暑さにスタツフは少々バテぎみでした。しかし冬には見られなかった雄大な自然

に心身とも浄化された思いがしました。

そんな中でちよつと気になる光景に出合いました。一度と言わずたびたびです。それは広大な農地にぼつんと捨てられた廃屋です。冬場は雪に埋もれて気づかなかつたのでしょうか、崩れつばなしに放置され、ただ自然に帰るのを待っているといった姿で、屋根が落ち、柱が腐り、雑草が生えて朽ちてゆくままになっていきます。絵のモチーフとしてはとても触発されるものがありますが、ここに住人が居たことを思うと少々複雑な思いに駆られます。

今回の作品で道北を除き北海道のおよそ半分を回りましたが、農場に限らず牧場でも街中でもないところでこの光景に出会いました。おそらく全道で見られるものなのでしょう。

北海道は各地の炭坑が廃止されて以降、人口の流出が激しく、札幌以外の街は過疎化に悩んで

います。あるいはバブル期、街おこしに始めた各種の開発事業が失敗に終り、その後処理に住民が苦しんでいる、など最近は暗い話題が多いようです。

今回の作品のテーマも、街おこしに失敗し死の街と化したところへG.T.Oが来るといった設定で、地方の人達にはあまり自分の良い話ではありませんでした。我々スタツフの姿勢も少々内向きになりがちでしたが、そうした中で救われる思いがしたのは、この土地で出会った人達のおおらかで温かな人柄でした。ロケハンで村全体が廃屋と化している場所があると聞き訪ねた時のこと、大変失礼だとは思いましたが、近くの村で農耕機に乗った男性に道を尋ねたところ、彼は実にあっけらかんと答えてくれました。「あつ、その村だつたら多分三キロメートルほど先の××村のことだろう……、でもこの村ももう人いないけどね、アツハハハ……。」

我々はどう対応してよいか分からず、ついつられて笑ってしまいました。彼は長靴を履きナイキのキャップを被った、ドラマ「北の国から」のソータ兄ちゃんのような人でした。

広大な大地に生まれ育った人に備わるものなのか、厳しい自然に耐えて暮らしている人に備わるものなのか、北海道の人達の心はどこまでも広く外に開かれている、そんな印象を受けました。

翻って自分の生れ育った京都のことを思うと、北海道のような大自然はなく、山に囲まれた実に窮屈なところです。しかしその狭さ故に長い歴史のなかで築き上げられた極めて複雑で高度に洗練された文化があります。京都人としてこの文化をとても誇りに思います。しかし同時にときとしてその閉鎖性が気になります。

京都を出て二十年になります。が、故郷に対して思うのは、歴

史の上に胡座をかいて大切な文化を腐らせてしまわないよう、風通しの良い街であってほしいということ。まわりを囲われた土地だからなおのこと、新鮮な風が吹き抜けるよう努力したいものです。

「児童虐待」から 見えてくること

延原正海

(社会福祉法人大阪水上隣保館
理事長補佐)
65年大学商学部卒業

三十数年間、児童養護施設で働き、いろんな子どもたち、親、家族と出合い考えさせられ、気づかせて頂いたことが沢山ある。

最近の児童養護施設への入所は直接・間接的に児童虐待がらみの理由によるケースが急増している。その中でも特に身体的虐待が目立っている。親が子ど

もを殴ったり、蹴ったりしていいには死に致ることも少なくない。社会的矛盾や人生の困難を背負った親のストレスが原因やきっかけにもなっているが、親の側には子どもを虐待しているという意識は弱く、「しつけ」としてやっているだけと思っていることが多い。親自身が子どもの頃、親や保育者・教師等の大人からうけた体罰によるしつけを無意識的・肯定的に受けとめてそのまま繰り返しているのがある。しかし罰によって子ども(人間)は変らない(人間が変わることができるのは本人自らの心からの反省と悔い改めによってである)から、体罰は必ずエスカレートする。(体罰にも限度があるという限度論の矛盾もここにある。体罰には限度などない。)

体罰肯定論の唯一の論拠となつている「愛の鞭」論は、愛情があれば体罰(暴力)もOKということではなく、教育やしつ

けにおいては、時には「厳しさ」も必要という教育要求の厳しさのことであり、人間として許されないこと(例えば生命にかかわることや、人の心に深い傷を与える差別等)は絶対に許さない・譲らない・認めないという大人の側の毅然とした対応・態度のことであって決して体罰肯定ではない。体罰は百害あって一利もない。しかし我が国の子育てにおける体罰肯定の文化は根深い。子どもの頃、親や大人から体罰を受けずして育つた者は少ない。体罰も暴力であり、それは「虐待」であるという認識も弱い。どんな理由をつけても、暴力は間違っているということこそ我々大人は身をもって子どもたちに教えたい。

我が国の政府が五十年以上前に戦争をおこし、二千万人のアジア・太平洋諸国の人々と三百万人の日本国民の生命を犠牲にしながらも今だに真に反省せず、合理化さえし、そればかりか日本国憲法に反してアメリカの戦争に協力して参加する戦争法(ガイドライン関連法)が国会で簡単に成立するような政治状況があるからこそ、このことを肝に銘じたい。愛情があれば、理由があれば暴力もOKであるという考えこそが体罰肯定の論拠であり、体罰を肯定的にとらえる者は、結婚して家庭を持った時、配偶者や家族に暴力をふるう家庭内暴力・虐待を平気で行う人間になること、また、最大・最悪の暴力である戦争を防止するためにも「どんな理由があっても暴力を使うことは間違っている」という考えを圧倒的世論・常識としたい。何故なら戦争はいつも必ずなんらかの理由をつけて行われてきたし、合理化されてきた。「平和のため」とさえ理由づけられて戦争は行われてきたことを忘れてはならない。

それにしても昨今のマスコミ文化の中における暴力の肯定的

使用がいかに日常化されているかに危機感を持つ。

マンガ・雑誌・テレビ映像の中にあふれている暴力・ポルノ・殺人のたれ流しは支配階級からの意図的な「教育・文化政策」ではないかとさえ思える。何故なら最近、景気回復のため戦争がおこってくれないかと待望し、平和憲法を敵視し、金もうけのためには手段を選ばない「死の商人」のための反動政治家や御用学者・知識人の動きも活発になってきているからである。

暴力肯定文化にとりかこまれ、空気をすうがごとく、暴力に対して無感覚・無批判的に育った子どもたちが大人になった時、どんな社会・世界になるのだろうか。

今こそ同志社のキリスト教・創立者新島襄先生の良心教育の真価が問われている。

二つの宗教

久我なつみ

(作家)

77年大学文学部英文学科卒業

おかげさまで、昨年暮れに、拙著『フェノロサと魔女の町』が本願寺維持財団主催・河出書房新社協力の蓮如賞を受賞することができた。以来、多少なりとも物書きらしい生活になって、あわただしい日々がつづいている。

朝日新聞や読売新聞が全国版でとりあげてくれたので、遠くにも暮らす旧友が久しぶりに電話してきてくれたりした。が、フェノロサってどんな人なのか全然知らない、などと言われ、最近では忘れられた存在なのだと、彼に思い入れの強い私は、ちよつとがっかりした。

もちろん、アメリカの美術研

究家アーネスト・フェノロサのことで、明治期に来日し、日本の伝統美術を世界に知らしめた、日本近代美術の「恩人」である。彼はペリーの来航と同年に、東海岸のセーラムという町で生まれた。作家ホーソーンの生誕地としても有名なこは、アメリカでただ一カ所魔女裁判がおこなわれた土地として知られる。二十人もの無実の人が処刑された裁判はマサチューセツツの大冤罪事件とよばれ、三百年を経た今もアメリカにおいて語りつがれている。

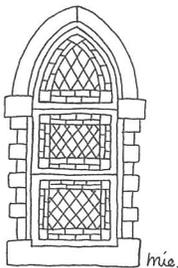
それほど厳格なキリスト教の町に生まれながら、フェノロサは日本で仏教に傾倒し、改宗してしまう。

拙著では、キリスト教と仏教という、二つの宗教に、いわば引き裂かれる彼の内面をテーマとした。もはや過去の人物であるフェノロサの、セーラムというなじみのない土地との葛藤を描いたのであるが、本が出版さ

れてからは、意外と、読んで共感したという手紙を数通、昔のクラスメイトや見知らぬ同志社人から頂いた。

仏教国の日本に生まれて、同志社というキリスト教の学校に通うことに、たくさんの人が迷いを感じながらも、なお同志社に強い影響を受けて、誇りを感じたり、懐かしんだりしているのだなど、しみじみ思った。

蓮如賞の選考委員をつとめられた作家五木寛之氏から、拙著は、「宗教をテーマにしながら現代性があることが受賞のポイントとなった」との選評をちょうだいした。これも、ひとえに同志社に学んだおかげと、心から感謝する次第である。



同志社盛岡講座開催

―新島襄先生の恵み―

佐藤孝悦

(同志社校友会岩手支部)

67年大学法学部卒業

近年、盛岡に近い金ヶ崎町と石鳥谷町が、同志社のルーツとも言うべきアーモスト町・ラットランド市と姉妹都市の交流にあつたことが判り、両町で松山義則総長、八田英二学長が記念の講演をされた。昨年十月のことである。

また本年六月五日には同志社盛岡講座が、昨年の熊本市に次いで東北で初めて、この盛岡市で開催された。二年連続、岩手の地で同志社のイベントが開かれたことは大変光栄な事で、創立者新島襄先生のお導きと思ひ、地元の卒業生としては欲びと共に、深い感慨を覚えるもの

である。

公開講座は昨今、各大学で開かれていく。培われた知識、情報の提供者としては同じと思うが、人間として生きていく大切さを説く大学は殆ど無いのではと思つている。

新島精神が息づいている同志社大学は、これが出来る大学である。

盛岡講座のメインテーマは「情報社会は何を求めらるか」であつた。東北では馴染みの薄い関西の大学講座に、我が盛岡市民はどれだけ来てくれて、どのような興味を示してくれるか心配ではあつたが、熱心な質問攻めに合うぐらい、それは無用の心配であつた。

東北は誘致企業を除き、殆どが中小・零細企業である。仕事も途絶えがちになる冬季は出稼ぎ労働者がまだ沢山いる地区もある。そんな中で、情報交換は企業人にとって大変な活力源になる。その情報が大学によつて

提供されるのであるから、「元氣な企業人」にとつてこれほど嬉しいことはない。

大学から役員を迎える、企業と大学との共同開発、相互のコンサルタント契約、それぞれが積極的で、歓迎すべき相乗効果を生む要因となる動きである。

盛岡講座を受講しながら、これらのことを考え、さらに、細分化された分野（二十一世紀産業の特徴と高井紳二助教授は説かれた）のエキスパートを目指せば、小規模零細企業でも十分力を発揮できるチャンスがいくらでも生まれてくる、と思ひを馳せた。

「失敗を多く経験してきた人」「転職で多才な技術、経験を積んできた人」はこれから貴重な人材として多方面から歓迎される様になるであろう。その意味で二十一世紀は既成概念を破つた動きが出、どんな人でも活躍できる場が数多く提供されて来るであろう。

今回は、我が社の社員二人も受講したので、後日この様な話を交わし、「夢」を抱くことができたのもプラスであつた。

盛岡は「地の利」からしても公開講座開催地に最適と思つている。物理面（高速道、新幹線、空港など交通の便）、自然環境面の良さがその理由であり、多くの優れた先人を生み出した土壌もまた理由のひとつである。

提供する側（大学）と求める側（地方）が一体となり、二十一世紀の日本の建設に役立つとするなら、優れた環境の地から優れた人材が同志社の公開講座によつて生まれれば、こんな嬉しいことはない。「人の道」を説きながら「講座」が進む。同志社らしくて良いのではと思つている。

二十一世紀に向けての開かれた学び舎、素晴らしい企画と創造性を身に付け、建設的な歩みをする同志社。学内に止まることなく、広く社会に向けて、国

内外に向けて発信していく同志社。

同志社の公開講座がこの精神を担い、進んでいくよう祈念するものである。

盛岡講座がきっかけで、東北に同志社ブームが起こつてくれれば大変嬉しい。同志社校友会岩手支部の新たな結束もこれが生まれたような気がする。すべて新潟巽先生のお導きがここにありように思える。

良心のもとに、自由な学園、同志社に栄光あれ！

記者の勲章と震災報道

田中智佐子

(毎日放送記者)

’90年大学文学部英文学科卒業

因果な商売をしている。

取材するたび、そう思う。「人の不幸でメシ食ってますから」。そんな冗談を言うこともある。

記者の価値は取材力で決まる。スクープを取れば一人前。

それが試されるのが、大事件だ。新聞・テレビ入り乱れての取材合戦で、誰かが抜きん出る。誰もが自分の勲章を持ちたい。大事件が起きるたびに嬉々として駆けつける記者もいる。しかし私はその類ではなく、一年を過ぎててもなかなか存在感を示せずにいた。

それが、五年前の夏、ふとしたことから地震の勉強を始めた。知識を吸収する面白さから企画が浮かび、一時間半の地震番組のディレクターをさせてもらえることになった。

ところが。

その前に地震は来た。

一月十七日、阪神大震災。

「地獄や」。初日から神戸に入った記者は、疲れた顔でこう言った。

私たちは、初めて知った。街が破壊されることがどんなことなのか。人が亡くなることがど

んなことなのか。誰もが自分のすべきことを必死にしていた。スクープでもなんでもない。ただ被災者の役に立つことを。でも、伝えても伝えても相手は大きすぎた。

地震から一年。駆け出しだった私は、いつの間にか「地震専門記者」と名乗るようになり、数本の地震ドキュメンタリーを作らせてもらっていた。皮肉なものだと思う。地震で初めて記者としてのアイデンティティを持つことができた。

そして。地震からまもなく二年になる頃のこと。

淡路島の犠牲者全員の死因をすべて聞き取り、見取り図に残している地元医師がいた。取材に難色を示す彼を説得し、遺族を取材した。

その中に、夫を亡くした六十歳の女性がいた。はじめは「カメラの前で話すなんて……」とあまりよい返事はもらえず、家の玄関先で失礼した。「地震の教訓

を伝えるために……」という紋切り型の言葉で取材を申し込んだと思う。「教訓のために死んだわけじゃない」。そう言い返されても仕方がないと思っていた。

ところが、二度目に訪れたときには、全壊した家の跡地に立つて夫が亡くなったときのことを涙ぐみながら話してくれた。

淡路島の小さな町で、テレビカメラが一日うろろすれば、またたく間に噂は広まる。「テレビに出るために死んだ家族を引き合いに出している」と思われないこともない。その中で二家族が、カメラの前で精一杯の話をしてくれた。そのほかの取材も含め一時間の番組となり、ある映像コンクールで科学技術庁長官賞を受けた。苦労が報われたと思った。

その少し後のことだった。泊まり勤務を終えて、夕方のニュースを家で見ていた私は、淡路島で駐車中のトラックのブレーキがはずれ暴走する事故があっ

たことを知った。私の目は、画面の字幕スローパーにくぎづけになった。犠牲となった女性の名前。それはあのとき取材に応じてくれた彼女のものだった。

多くの人の犠牲の上に成り立っている。だから、たとえ記者としての勲章がもらえたとしても手放しでは喜べない。それがこの仕事の宿命と今ではあきらめている。

まもなく、あれから丸五年。地震報道は転機を迎えている。近畿はこれから四十年の間に、直下型地震を何回か経験した後、津波を伴うような海底の巨大地震に襲われるという。被災地を忘れてはいけない一方で、次なる地震の備えをも呼びかけなければならぬ。細くとも長く。

因果な商売。でも自分のためではない。テレビとラジオの向こうの、数百万人へのメッセージだと思えば、続けていられる。

高句麗壁画古墳を通 して日朝関係を見る

吉岡 淳

(日本ユネスコ協会連盟事務局長)
70年大学経済学部卒業

去る四月下旬、「近くて遠い国」といわれる朝鮮民主主義人民共和国(北朝鮮)を訪問した。私自身三度目の訪問である。いずれもユネスコ公式ミッションとしての訪朝で、観光旅行では経験できない北朝鮮の素顔の一端を垣間見ることができた。

日本と北朝鮮とは、昨年来テポドンの日本領土越え発射や日本領海内への不審船の侵入事件などをめぐって緊張関係が続いている。また北朝鮮では百万人以上ともいわれる夥しい餓死者がでるほど食糧事情が悪化していると報道されている。その一方でテポドンの開発に莫大な予

算を注いでいるといった具合で、不可解で、その実態がさっぱりわからない国である。そんな国に三度も行くなんて物好きだと思われるかも知れない。

私は、一九六八年に現在の勤め先である日本ユネスコ協会連盟とユネスコ韓国委員会の共催による「日韓ユネスコ学生交換計画事業」の第三回訪韓学生として同志社大学在学中に訪問して以来、朝鮮半島問題には少なからず関心を持ちつづけてきた。訪韓はそれ以後十五回を超えた。決して朝鮮・韓国問題の専門家ではないが、日韓の民間ユネスコ活動の交流事業を通して多くの知人を持ち、日韓の歴史や文化などの理解を深めてきたことは確かである。最近では、在日朝鮮・韓国人々との交流も増え、いつのまにか書棚の書籍は、朝鮮・韓国に関するものが圧倒的に多くなっている。朝鮮半島に関することになると、なぜだかわからないが血が騒い

でしまうのである。

余談が長くなってしまったが、前回(一九九七年一〇月)および今回の訪朝の目的は、平壤近郊にある高句麗時代の壁画古墳の保存と世界遺産登録に向けての支援のためであった。

高句麗はBC一、二世紀頃からAD八世紀頃まで鴨緑江周辺から平壤を中心に栄えた国で、その時代に造られた古墳が、盗掘や破損にあいながらも千五百余年後の今日においても奇跡的に残されてきた。平壤近郊には約八十基の古墳があり、そのうち約二十基の内部にはいまま鮮やかに壁画が残されている。

壁画古墳の内部の湿度は平均十五度前後、湿度は九〇パーセント以上に保たれている。安岳三号、徳興里、江西大墓の古墳壁画は見事なもので、明らかに日本の高松塚やキトラ古墳の壁画の源流と理解できる。考古学者ならずとも一度はこれを見たと思うほどに魅力的である。

来年の春には、ユネスコの主催で、平壤、ソウル、東京で「高句麗古墳展覧会」を開催する予定である。

日本と朝鮮半島の問題を考えた時、政治や軍事面で論じるよりも、日本と朝鮮半島の長い歴史、文化的関わりを通して相互の理解を深めていくことこそが「近くて遠い」関係から、「近くて近い」関係に転化していける近道ではないだろうか。幸い韓国においても金大中大統領の英断で日本文化の門戸開放が実現した。そして二〇〇二年には、日韓の共催でサッカーのワールドカップを両国で実施する。文化やスポーツ交流が朝鮮半島と日本の不幸な近・現代史を乗り越え、新しい時代を拓く一助になるかもしれない。それを大いに期待したいものである。

ヘルンフート再訪

水谷 誠

(大学神学部助教授)

この三月に、ドイツ・ハレで学会が開催されたのを良い機会に、ヘルンフートを訪ねた。このザクセン州東端の、チェコとポーランドとの国境地帯にある人口千五百人ほどの小さな町を訪れるのは、二度目である。今回は事前に連絡をしていたので、ヘルンフートにとどまらず同じ由来のもう一つの町ニースキーや関係する諸施設の案内を受け、親しく当地の人々と接することができた。

「ドイツ敬虔主義」の流れをくむヘルンフートという名は、十八世紀以降のヨーロッパの思想史の中で見逃せない重要な役割を果たしている。メソディズムの祖ジョン・ウェスレーがヘル

ンフートに共感を示したことは有名であるし、デンマークの実存思想家キルケゴールやドイツ・ロマン派のノヴァーリス、さらに十九世紀のドイツ語圏の重要なプロテスタント神学者であり、自らを「高次のヘルンフーター」と呼んだシュライエルマッハーなどこの派の敬虔の影響を受けた人々は数多い。

この町は、十八世紀初めに、ここを含むオーパーラウジッツ地方を所領としていた貴族、ツインツェンドルフが、モラヴィアからやってきた信仰上の難民をこの地に受け入れ、ヘルンフート(「主の守り」の意)と名付けたところに始まった。やがて、この領主の指導下に彼らは「ヘルンフート兄弟団」(英語では「モラヴィアン・チャーチ」という)という信仰共同体を形成し、各地で活動を繰り広げることになった。現在は、ドイツのプロテスタント教会の一翼を担う自由教会を形成している。

ヘルンフートで一般によく知られているのは、ローズンゲンであろう。これは、兄弟団の創立当初より二百五十年を超えて毎年作成されている聖書日課である。このローズンゲンというドイツ語は「くじ引き」を意味する。そこには、聖書の言葉を選ぶにあたって、人の意図を介在させないという目論見が込められており、十八世紀という時代の知恵を感じさせる。この「くじ引き」が毎年なされる部屋で、その作業の案内を受けたのは印象深い経験であった。滞在中に世話を受けたレーブ牧師に、兄弟団の信仰の特色を問うたところ、悔い改めを通して生じる「喜び」が中心だという答であった。参加した二度の礼拝のうちの一つは讚美礼拝であった。十曲ほどの馴染みのある讚美歌を歌い続けたこの礼拝を通して、「喜び」の情感を大切に作る共同体だということをよく実感することができた。

レープ牧師の紹介で、北方に車で一時間ほどの距離にあるニースキーも訪ねた。この町もヘルンフート兄弟団の面影をよく残している。町の中央のツインツェンドルフ広場には兄弟団の教会が建ち、両隣にその牧師館、旧市長舎、さらにその外側に兄弟団のシスターハウス(第二次世界大戦直後に破壊され、今はない)とブラザーハウスが配置されて、創立時の名残をとどめている。広場をはさんだ教会正面には、この派の子弟のための教育施設で、前述のシュライエルマツハーが寄宿生活をしたベダゴギーウム(現在は公立の小学校と図書館)が建っている。この町は兄弟団の町として発展したのである。

ヘルンフートでは、老人ホームを訪ね、入居している人々と語り、ニースキーでは、総合病院を擁する福祉施設「エマオ」を訪ねた。施設長のベトヒャーさんは、兄弟団の牧師である。

しかし教会活動よりもむしろ施設経営のトップとして多忙な毎日をごす。彼との話の中で統合後のドイツ社会が話題にのぼった。西部ドイツに比して、アルコール中毒で繰り返し入院する人々が多いこと、また、西側を見れば、繁栄した社会があり、東側を見れば、国境地帯に押し寄せている多くの難民があり、自分たちはその矛盾の境目に生きていることなど。話を聞きながら、思わず自らの日常生活に目を向けることになったのである。

同経会寄付講座

経済学部卒業生が組織する同経会が'97年度から支援している寄付講座が、本年度も開かれています。同学部の専門科目として設置されているもので、一般にも公開中。春学期の「日本経済と私の経営論3」に引き続き、秋学期は「京都経済」をテーマに授業を行います。開講日はいずれも金曜日。詳細のお問い合わせは経済学部事務室(☎075-251-3520)まで。

日程	サブテーマ	講師
10/8 10/22	江戸時代の町人思想(京都)について	關イセト 会長 小谷 隆一氏
10/29	21世紀の京都産業	京都商工会議所 専務理事 小堀 脩氏
11/5	京都の企業家―ベンチャー精神を探る―	
11/12	21世紀の卸売市場 ―中央卸売市場の役割と法改正―	京都青果合同協 社長 内田 昌一氏
11/19	これからの日本の農業と食料問題を考える ―世界の人口増と食料の安全保障―	
12/3 12/10	創業者とともに50年	京都証券取引所 理事長 中村 伊一氏
12/17	最近の電池産業の動向	日本電池協 社長 田中 千秋氏
2000年 1/7 1/14	京都商法にみる伝統と革新	吉忠協 社長 吉田 忠嗣氏

同志社群馬講座

同志社大学・同志社女子大学では、教育研究活動の成果を、広く社会に公開することを目的に、全国各地で公開講座を開催しています。熊本講座、盛岡講座に続き、今秋には群馬県前橋市で下記のとおりに開催します。

- 日時 1999年11月13日(土)
13時30分～16時30分
- 会場 群馬県社会福祉総合センター
(前橋市新前橋町13-12)
- テーマ 「いのちを考える」
13時30分～「13歳―なぜここに子供と大人の境界を見ようとするのか―」
講師 村瀬 学(同志社女子大学助教授)
15時～「環境といのちの世紀―食べ物を中心に考える―」
講師 西岡 一(同志社大学教授)
- 入場無料・事前申し込み不要
主催：同志社大学・同志社女子大学